

ずいそう

山 菜 採 り

岩 本 忠 和



午前3時家を出発、午前5時入山、午前10時下山朝食、午前11時半鳴子温泉「滝の湯」で体を癒す。山菜採りをしない悪友が嫉妬からか、羨望からかわからないが、「岩本の歩いた跡には草木も生えない」などと言いつらしているが、山菜は私に採られるのを待っているのである。

私は小さい頃から近くの里山で山菜採りやキノコ狩をし、川で鮎や鮎捕りに明け暮れて育った。そのせいか、今も山の緑、川のせせらぎに接するとどんな悩みや苦しみも、いっぺんに吹き飛んでしまう。特に山菜採りは趣味と実益を兼ね、運動にもなるので好きである。

私の山菜採りは、主としてネマガリタケ、ゼンマイ、ワラビ、シドケ（モミジガサ）、ホンナ（ヨブスマソウ）、ミズ（ウワバミソウ）それにエゾニュウなどである。

これらの山菜のうちエゾニュウは、セリ科の植物でシウドの一種であるが、秋田県の一部の地域で食用として利用しているめずらしい山菜である。

シドケは山菜の王様といわれるが、私が採るシドケは、土砂崩れが激しい湿った急斜面に生えているため、命綱なしには採取困難である。どうして採りづらい所に生えるのか不思議である。まるで私に「採るなら採ってみろ」といわんばかりに挑戦しているような気がする。

ホンナはシドケと同じように強力な香りを持ち、茎の柔らかい先端部分を食用として採取してくる。シドケが山菜の王様なら、私にとってホンナは山菜の女王という格付けである。ちょっとした湿地にはいくらでも生えており、採るのが一番楽な山菜でもある。

ところで、山野草にはトリカブトやコバイケソウなど猛毒の野草もあり、細心の注意が必要であるが、どの「山菜図鑑」を見ても毒草の若芽の写真が無く、美しい花の写真しか載っていない。毒草の若芽と山菜の若芽を比較した写真を是非載せて欲しいものである。

私が秋田県田沢湖町に住んでいた昭和61年の秋頃、玉川ダム上流の湛水予定地が焼き野原に変わった。その翌年、その湛水地は雪代水にきれいに洗い流され、鼠色に輝いていた。周りの山はコブシの花や山桜で北国の春を謳歌している。ある日曜日、その野原にワラビ採りにでかけた。そこに入ってびつくり仰天、野原一面に親指ほどのワラビが林立というか群生というか

びつりと生えていたのである。しかも山のアスパラと言われるヒデコ（シオデ）と2種類だけしか生えていないのである。

田沢湖町在住時代には、もう一つの思い出がある。9月下旬のある土曜日、国道46号沿いの秋田・岩手県境の仙岩峠に茸狩に出かけた。山に入っても毒キノコも見あたらず、この日の山は全く茸菌の匂いも無しである。竹藪を抜けてブナの林に入り、少し平坦な場所にきたとき、突然プーンと強烈なキノコの香りが飛んできた。香りの方向を探りあて10mくらい進んだ時、ブナの古い切株の上に直径50cm以上はあると思われる「マイタケ」が花開くように輝いていた。まさにその場で舞い踊ったものである。

後日地元住民とお酒を酌み交わしたとき、マイタケを採った話をする。「俺は60年も田沢湖町に住んでいても、山では一度も舞茸に出会った事が無いのに、お前は運がいいなあ」と羨ましがられた。

ところで、山菜の世界でも人間以上に領域争いが激しいことを目にする。日当たりのよいワラビが群生している場所に、タケノコがその日当たりを求めて根を伸ばして来る。10年前はワラビしかなかった所が、現在は竹林になっていたり、竹林にぐるりと囲まれているが、自分達だけの領域を死守し、大きなワラビが群生していたりと、私の目から見ればタケノコとワラビの場所とり合戦はすさまじいの一言である。

私の山菜採りは、山の恵みを収穫する楽しみの他に、可憐な山野草に出会うことも楽しみの一つである。カタクリの群落は至るところにあるし、ホンナ採りをする所には、白や紫のキクザキイチゲが群生している。シドケの山には、淡い紫の花をつけたシラネアオイがひっそりと群落を作っている。山道の斜面の一角なのに、シラネアオイを誰ひとり盗掘する者がいないとみえ、毎年忘れずに咲いてくれるのが大変嬉しい。

いろいろな山菜が生えているこの山は、20年くらい前は私だけの宝の山だったのに、最近では多くの方が山に入るようになった。しかも毎日が日曜日の方が多く、私が土曜日に行ってもあまり収穫ができなくなった。それでも私だけの秘密の場所がまだ少し残っているのが幸いである。

——いわもと たかかず 社団法人日本建設機械化協会東北支部
(前)災害対策機械部会長/
株式会社荏原製作所東北支部部長——